

研究発表第2室(506)

語彙習得における類似性のはたす役割

愛知大学 中 野 美知子

目的： 従来、類似性 (similarity) は 言語学習において 重要な役割をはたすといわれている (eg., Quine, 1976)。言語学習の内、特に 子供が単語を覚えるさい、類似性が かなりの役割を果たすことが知られている (Clark, 1977, Bowerman, 1978)。このような、母親による日記や記録は 重要な資料を提供している。しかし 教師による学習の記録は 母親の手による記録とは 本質的な差があるようだ。教室の教師は この意味で、実験室の実験者だともいえる。実験者としての教師には 次の不安がともなう。被験者がどういうブラックボックスを内在しているかについて確実な証拠がないということだ。教師としての実験者は、被験者がどのような類似性を主観的に把握しているか 明示できることが要求される。本研究は従来よりある類似性という概念を明示化しようという試みである。

心理学者 Rosch の語彙の構造モデルは 同じく心理学者の Posner 等先駆者の実験研究をふまえており、母親による母国語の発達の記録とも矛盾しない。Rosch のモデルは実験に基づいているが、名義的で概念的である。ここでは Rosch のモデルに簡単な論理性をあたえようとする。特にここではふたつの単語の学習法を上述のモデルをふまえて 調べていく。

エリシテーションとして 次の方法を取っている。刺激文としては日本文を使い、10～11文の日本語間の類似性が 英語・翻訳度にどのように影響を与えるかについて考察していく。

近年、明示性とは、論理性や数量化の問題と深くむすびつけられている。このことは 従来、人が言語を獲得する過程は かなり論理的なものだといわれてきたことと 一致している。しかし、上述したように、認知内で示される論理の働きを 実験者が手探りで検証していくのは むずかしい。しかし 言語材料を正確に数量化し、また 数量化の方法を論理式とむすびつければ、不可能ではないと思われる。本研究はその試みである。

論理化の導入という面倒な手続きをおこなったため、心理学者ピアジェの論理の発達図式にも 関連づけることができ、多少 検討している。

方法： (I) 材料：数量化しやすいことを考え、統語材料をさけ、意味論的材料を選んだ。材料としては、“こわす”と“やぶる”という動詞をとりあげ、異なる目的語10個、11個をつけ、こわす 11文、やぶる 10文を日本語で作成した。これは 各動詞について、基本的意味から比喩的意味について網羅するためである。

(II) 被験者： 中学3年生男女ふくめ45名が参加した。

(III) 教示法： 各動詞につき、10文ないし11文中 1文のみが英語の“break”を使って表現されることを教示した。他の9文ないし10文が、breakをつかって英語で言えるか質問した。

(IV) 分析法： (a) 被験者は習った1文と他の文との類似度を考え、翻訳度を推論することが当然予想される。そこで、サーストントルグソンの対比較法により、2文間の類似度をあらかじめ測定した。

(b) 被験者がどんな情報処理法をとっているかを、多次元尺度法により調べた。

結論：

- ① (Ⅳ)の(b)により被験者は範疇処理を行っていることが判った。パフォーマンス・ファクターとして やぶるについては ドミナント処理法が認められた。
- ② やぶるについては被験者は加法束のもとづいて英語の翻訳度を考えており、こわすについては分配束のもとづいていることが認められた。
- ③ 上記の分析法は被験者の日本語のコンピタンスが完成しているとみなされるから正確な数量化をはかれたのである。はっきりした測定が得られてこそ、翻訳度の方向性と動きを実験者は追いかけることができた、その結果背後に働いている論理性を抽出することができた。

従来、第二言語獲得研究は一部の理論家から軽視されて来た。しかし本研究が示唆するように、被験者の完成したコンピタンスを実験者が逆に利用すれば正確な数量化を行える点は利点である。

- ④ 又、第二言語獲得過程が 第一言語獲得過程と 相似形に浮きぼりされているのも認められた。したがって、し、被験者を 実験的に 利用することは し、獲得過程の研究にも有効な手段を 提供するのではないかと期待される。